

# よくわかる 現代ガラスアート

武田厚 (美術評論家)

ガラスは未だに夏の涼しさと抱き合わせにされて迷惑している、とガラスに代わって一言言ってみよう。ガラスは夏の季節ではない。ガラスには年中もつと伸び

び伸びと生きてもらいたい。ましてや現代のガラスアートにおいては、当然ながら夏も冬も、そして春も秋もない。ただし、ガラスのオブジェも個性的な器も見た目

に涼しそうであれば、盛夏の季節にそれらを取り出し、窓際に置いてみたり茶道具に見立てたりして楽しむのは、無論ガラスを愛する人たちだけの特権のようなものであり、かつ有意義な自由である。

ところで、現代のガラスといいつてもその中身は多種多様そのものだ。陶磁器分野の比ではない。顔も形も大きさも際限ない程に日々拡がっている。行き着く先はどこなのか誰も分らない。それだけに、表現メディアとしての可能性を心配するガラス作家はいない。裏返せば、その可能性を気にする作家がい

るとすれば、そこには期待されるべき冒険も実験もあり得ない。とはいえ、今のガラス界に在る作家の仕事振りを見ると、一時ほどの無鉄砲な勢いは少し影を潜め、どちらかという、やや落ち着いた状況にあるといっている。たぶん時間の中で淘汰されてきたことであり、好ましいことである。

いわゆる「スタジオガラス」と称された現代ガラスだが、これは一九六〇年代はじめにアメリカで提唱された「スタジオガラス・ムーブメント」に因るものである。小さな個人のスタジオがあれば、伝統的な技術を持っていなくても、何らかの方法で自分だけのガラス作りができますよ、といった主旨の啓蒙運動だった



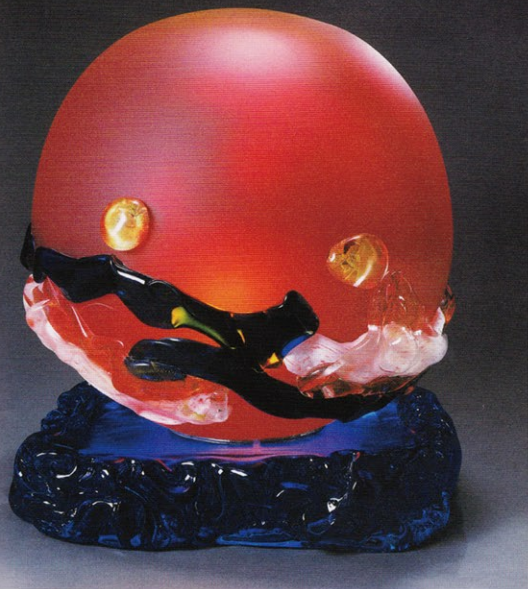
西中千人「呼籠（よびつき）」2011年 H23.5cm

が、この目からウロコのような発想の転換に、ガラスの好きな世界中の人々が覚醒し、スタジオガラスは一気にアメリカ国内を巻き込み、徐々に世界へと蔓延していった。なにしろ、数千年のガラスの歴史をひっくり返すような画期的な意識改革だったのだ。日本では七〇年前後から徐々に意識が高まり、盛り上がりつつ

〜 中略 〜

西中千人は、ごく近年になって自身が開発した器形オブジェの成功によって個性的表現の扉を開けた作家である。これもまた日本民族固有の裝飾的美観のようなものをモダンで新鮮な表情に変観させている一例だ。

〜 後略 〜



橋田高平「昇る太陽」2001年 H53cm